



# 佐藤郁次氏資料 : 練習船乗員の一動向と戦前・戦後の進徳丸

菊地, 真

---

(Citation)

海事博物館研究年報, 53:44-47

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504884>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504884>



# 佐藤郁次氏資料

## ～練習船乗員の一動向と戦前・戦後の進徳丸～

神戸大学海事博物館専門員 菊 地 真

### 1. はじめに

2025年度受贈資料として「佐藤郁次氏資料」一括を紹介する。本資料はご遺族から、進徳丸にかつて佐藤郁次氏が乗船していたという縁から寄贈の申し入れがあり、受け入れたものである。進徳丸に関しては『練習船進徳丸史』ほかに詳しく、実習をした学生の手記なども多いが、乗員という立場からの資料は比較的少なく、往時を知る資料として重要と考えた。

佐藤郁次氏資料は、同氏に関する履歴書や辞令といった書類22点と、写真6点、手紙8点、図書3点ほか、合計44点からなる。なお履歴書等の書類22点は後述する出身学校（東京高等商船学校。現在は東京海洋大学）にすでに寄贈されており、海事博物館で受贈したのは書類の写し（コピー）であることをお断りしておく。

また寄贈者である佐藤成美氏からは他に、自身の半生をまとめた『忘れじの神戸』（自費出版）も寄贈頂いた。同書はいわゆる自分史であり、佐藤郁次氏のことや戦後間もない阪神間の様子もうかがえる資料となっている。

### 2. 佐藤郁次氏の生涯

佐藤郁次氏（以下、特に断らない限り佐藤氏とは佐藤郁次氏を指す）は1911年（明治44）福島県生まれで、1936年（昭和11）11月に東京高等商船学校航海科を卒業し、同年に大阪商船に入社して6年ほど商船に乗船した。大阪商船在職中に乗ったのは北京丸、ほるねお丸、高砂丸、もんでびでお丸、屏東丸、九州丸である。



図1 屏東丸にて  
（大阪商船時代、最後列で賞状を手にするのが佐藤氏。  
1939-1941年頃）

佐藤氏は三人兄弟の長男にあたる。父親が比較的早く亡くなったため、年の離れた弟や妹をよく気にかけていた。東京高等商船学校の在学中、海軍兵学校での教練（図2）や、実習で北海道・根室港に寄港時の手紙（図3）には、

「もうすぐ、なつやすみですね。兄さんも八月二日ころかえります。兄さんは今日、ひこうきにのって…とんできました。（中略）では、仲よく遊んで、お待ちください。」

「ここ（根室）では今たんぼぼのまっさかりです。ちょうど福島へんの五月か四月の気候で…。（中略）では、一生懸命勉強して下さい。」

など、近況とともに帰省の予定や弟妹への言葉が書かれており、故郷の遠い福島に暮らす家族への思いが折々の手紙からうかがえる。



図2 横須賀海軍航空隊の絵葉書による（1934年消印）



図3 根室港内流水の景の絵葉書による（1934年消印）

1939年、大阪商船のもんてびでお丸で太平洋から横浜港に向かっていった際に書かれた手紙は、弟へ便箋11枚に渡る長文の手紙となっている。中学入学を控える弟に対して、11項目にわたる「処世の道」を説き、兄として親代わりの気持ちを伝えている（図4）。



図4 福島弟宛ての手紙  
（1939年消印。右は手紙の一部）

佐藤氏は大阪商船への就職に際し、同郷で住友生命の横森盛雄氏に相談していた縁もあり、1942年に長女の横森一子氏と結婚した。同じ1942年には大阪商船から国の海務院高等海員養成所講師へと移り（海務院からの委嘱状が残る）、1944年から半年だけ大阪商船に戻るものの、1945年初頭には再び国の航海訓練所に移り、「進徳丸」に関わるようになった（辞令より、1944年7月に運輸通信省を離職して大阪商船に復職。1945年1月には再び大阪商船を休職扱いとなり、航海訓練所技術嘱託となっている）。

この頃は既に戦時下であり、国は輸送にあたる商船を徴用して確保するだけでなく、船舶の操縦にあたる航海士・機関士の人材育成と確保にも注力していた。佐藤氏が大阪商船の航海士から養成

所教員に抜擢されたのは時代の要請であったと言える。なお、大阪に高等海員養成所が開設されたのは1940年、海務院の設置は1941年である。

佐藤氏は結婚後すぐは甲子園に仮住まいしたが、ほどなく現在の神戸市灘区篠原北町3丁目に家を借り、終生の拠点とした。灘区一帯は近代に郊外住宅地として開発された土地で、阪急線より北側は高台のため、船の汽笛が聞こえ、大阪湾が臨める環境であった。

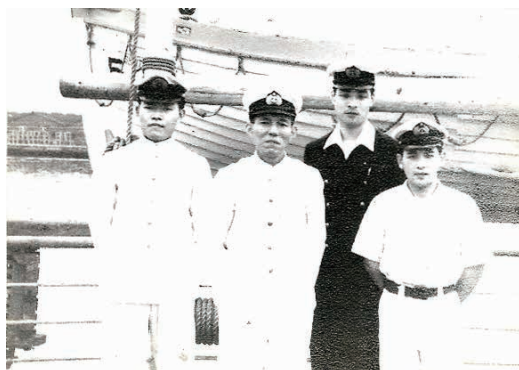


図5 スナッフ写真  
（左から2番目が佐藤氏。進徳丸線にて学生と与る。航海訓練所時代の1945年）



図6 スナッフ写真  
（右から2番目が佐藤氏。学生と与る。航海訓練所時代か）

佐藤氏は進徳丸乗員のまま終戦を迎え、1945年10月に航海訓練所の練習船、磯風丸の船長となる（図7）。そして1947年に磯風丸から、改装された



図7 磯風丸乗員の記念写真  
（前列中央が佐藤氏）

進徳丸に再び乗船している。

佐藤氏は晩年結核を患い、おそらく結核の症状が出てきた関係で、1948年には運輸技官となって船を降りている。その後は、神戸海上保安本部に勤務し、海技課長として任にあたったが、病状が悪化し、1949年4月に肺結核のため亡くなった。享年38歳であった<sup>1</sup>。

佐藤氏が亡くなって一子氏と2人の子どもが残され、翌1950年には義父母一家が同居することとなった。妻の佐藤一子氏は年の差があり佐藤氏より若かったとはいえ、当時は仕事も少なく一つ屋根の下、厳しい家計で日々を過ごしたと言う<sup>2</sup>。それでも近くに住む高等商船学校時代の同期たちがしばしば気遣ってくれたそうである<sup>3</sup>。

### 3. 佐藤氏と戦時下の進徳丸

進徳丸は1923（大正12）年12月に進水した、神戸高等商船学校の練習船である。毎年のように太平洋で遠洋航海実習を行い、サンフランシスコ、サイパン、ハワイ、オーストラリアなどを行き来し、学生たちの海技能力を高めると共に、外国への見聞を広めさせた。太平洋戦争が始まって遠洋航海が危険になってきたため、1941年の第34次航海が最後となり、以降は日本の沿海域における航海実習のみとなった。

さらに海技士の教育訓練を一元化するため、1942（昭和17）年1月施行の高等商船学校官制によって、神戸高等商船学校は文部省から逓信省へと移管された。また進徳丸も、逓信省が設けた航海訓練所に1943年に移管される。日本丸など他の練習船も同様に、逓信省の所管となっていった。

学生たちは1944年より、前年（1943）に開校した清水高等商船学校に入学するところとなり、1945年には高等商船学校がすべて清水に統合され、神戸高等商船学校は高等商船学校神戸分校となった。統合後、神戸高等商船学校の敷地には、船員の再教育機関として海技専門学院（現在の海

技大学校、芦屋市所在）が設置されたが、終戦直前の5月～8月の神戸空襲によって学舎の殆どは焼け落ちてしまっている。

進徳丸は航海訓練所所管となってからも引き続き神戸高等商船学校生を乗せて航海実習を行ったが、1944（昭和19）年9月にはそれまでの帆装が撤去された。すなわち補助機関としてあったレシプロ機関で航行する、汽船練習船・進徳丸へと改修された。

佐藤氏が次席一等航海士として航海訓練所に移った1945年1月は、進徳丸が汽船となった後であった。

この頃の進徳丸の船長は佐野道機氏で、佐藤氏は学生162名と共に、実習を兼ねて福岡県若松から兵庫県尼崎への石炭輸送に従事していた。そして1945年7月、瀬戸内海の二見沖で明石海峡を通過するため一時停泊して待機をしていた時、アメリカ艦載機による機銃掃射と空爆を受けた（7月24日）。『練習船進徳丸史』所収の学生の回想によれば、佐藤氏はメインマスト、あるいは船橋右舷側で監視にあたり、乗員や同乗の学生たちに指示を出していた。

この空襲によって学生5名（機関科4名、航海科1名）、乗員1名が亡くなり、16名が重軽傷を負った。船内では火災が発生し、船体は進水で大きく傾いて、転覆・沈没する恐れが生じたため、進徳丸は錨を切断投棄して、水深5メートルの浅



図8 任意擱座した進徳丸

- 1 佐藤氏が亡くなった当時ご子息は6歳、ご息女は2歳で、父親の思い出は余り残っていないそうである。ご子息は佐藤氏が磯風丸船長の時、神戸港停泊中に通船で船に連れられ乗せてもらったという。ご息女も成人後に事務員として船に乗ったご経験があり、ご家族の父親と船への想いは深く感ぜられた。
- 2 佐藤（横森）一子氏は1921年（大正10）生で、佐藤氏とは10歳違い。76歳まで生きた。一子氏は長女で、下に弟が3人の4人兄弟。佐藤氏が亡くなった後、一子氏の両親（横森盛雄氏は1952年に逝去）と弟2人が神戸大、神戸外大に在学中で同居し、一子氏は6人の生活を支える形であった。
- 3 例えば、かつての同僚が、練習船銀河丸の神戸寄港時に船内に招待してくれたことがあった。また別の船だが、広島方面へ向かう航海に妻の一子氏や子どもたちを乗せてくれたこともあり、船とは縁が切れなかった。苦しい生活であったが、一子氏は女学校を卒業し音楽の素養があったため、戦後、近所の佐藤氏の同僚宅でピアノを習ったり、娘が贈ったピアノを自宅で弾いて楽しんでいったという。楽しみの中にも神戸らしさが垣間見えよう。

瀬にあえて座礁した。

進徳丸は翌7月25日にも攻撃を受け、30日まで断続的に燃え続けたことにより、船体が完全に焼け落ちてしまった。

けれども戦後、商船の殆どを戦禍で失った日本は、少しでも利用可能な船舶を修繕し、海運復興に充てる方針を立て、進徳丸も1946年7月末より海から引き揚げられ、三菱神戸造船所にて、翌年5月まで一大改修を施された。

『練習船進徳丸史』には、改修に佐藤氏が関わったかどうかは明記されていない。佐藤氏は主に磯風丸船長として航海実習等の任に当たっていたと推測される。ただ、進徳丸の修理が完了した際の記念写真には佐藤氏も他の関係者と共に写っている様子が確認される。また佐藤氏は1947年6月に進徳丸の一等航海士となり、練習船として7月から運航を再開した進徳丸に乗船している。

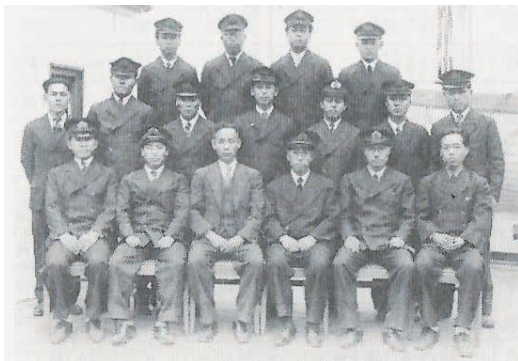


図9 進徳丸改修完了時の記念写真  
(前列左から2人目が佐藤氏)  
『練習船進徳丸史』より引用』

戦火に遭って焼け落ち、幸運にも沈没せずに改修され復活した、進徳丸の数奇な姿を、まさに身近に見続けた一人であった。

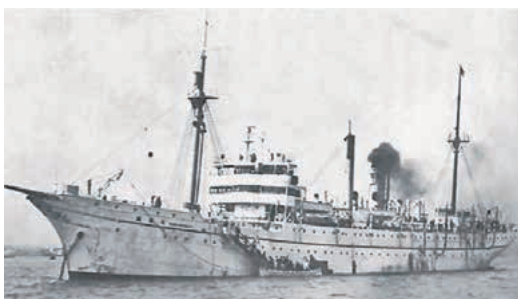


図10 戦後の汽船練習船進徳丸

#### 4. おわりに

本稿では佐藤氏の資料を軸に、佐藤氏の生涯と戦争に翻弄された進徳丸の様相をあわせて紹介した。

佐藤氏は残念ながら戦後間もなく亡くなられたが、進徳丸はその後も途中1956年に大改装もしながら航海訓練所の汽船練習船として活躍し、1963年に老朽化のため引退した。そして1995年の阪神・淡路大震災まで、神戸商船大学内に陸上保存(1967-1996; 1996年に解体撤去)されたことは周知のとおりである。2021年に「ふね遺産」(第38号; 非現存船第8号)に登録された進徳丸の諸資料と共に、佐藤氏の資料も本学関係資料として大切に活用していきたい。

#### 参考文献

神戸大学海事博物館運営委員会編 (2022)『ありがとう深江丸 ふね遺産進徳丸』神戸大学海事博物館運営委員会、図録

佐藤成美 (2015)『忘れじの神戸』佐藤成美

進徳丸史編集委員会編 (1989)『練習船進徳丸史』海文堂出版